

## 現代における自己疎外

—現代人のアイデンティティ危機の視点から—

鈴木 晋 怜

はじめに

昨今、ファジィという言葉が巷を席卷している。もっとも、あらゆるものが猛スピードで駆け抜けていく現代にあつては、今、流行っている言葉でも、一年もたてば、もはや死語となる場合が多い。従つて、この現代密教第四号が発刊される頃には、もうファジィなる言葉も古めかしくセピア色に霞んでいるかもしれない。

しかし、少なくとも一九九一年二月現在、この言葉は、まだまだ輝きを失つてはいない。そしてこの言葉の流行は、現代日本人にとってある必然性をもっているように思えるのである。

ファジィ (fuzzy) という英語の形容詞は、ファズ (fuzz) という「毛羽、縮れ毛、ぼやけ」などを表す名詞からきており、「毛羽のような、ぼやけた、はっきりしない、もうろうとなった、(毛髪が) ほぐれた」といった意味をもっているが、日本のファジィ理論研究者は、「あいまい」という言葉をあてているようである。

ファジィ理論とは、一九六〇年代に工学の分野で登場した新しい理論で、科学に主観性を導入し、主観的不確かさ

の様相を数学的に取り扱おうというものである。例えば、従来のデジタル型コンピューターがすべての情報を二値で割り切って処理し、全くあいまいさがなかったのに対して、ファジィ・コンピューターでは、ファジィネス (fuzziness) という人間の主観性に深く関わったあいまいさの概念を数理科学的に導入し、融通自在な人間の行動や動作をコンピューターでやらせようとする。すなわち、0か1か、yesかnoかの二値理論にとられることなく、0でも1でもない、yesでもnoでもない、あいまいさを追求していくのである。これまでは客観性こそが科学の証しであり、依り所であったのに対して、ファジィ理論は、主観性の存在を認知し、それを積極的に科学の領域にまで取り込もうとしているのである。従って、ファジィ理論の導入は、デカルト以来、営々と築かれてきた近代合理主義的世界観への対抗であり、現代における科学的ルネサンスと言えるかも知れない。

ところで、このファジィなる概念、すなわち、0か1か、yesかnoかに決定せず、その間の不確定を模索するという営みを、人間の主体性、あるいは個人のアイデンティティという観点から捉え直したらどうなるだろうか。

もともと、人間の思考・行動はファジィである。われわれは、デジタル型コンピューターのように二者択一的に明確に決定しながら思考し、行動しているわけではない。それは、われわれが言葉で思考している以上、そしてその言葉が概念包括的性質をもっている以上、当然の帰結と言えよう。

しかし、一方で人間は、私が私として生きていく以上、そこに何らかの同定を施さなければ、生きていけないのではないだろうか。つまり、自分は他の誰でもない自分であることを確定し、そしてその能動的な自我の力によって、自分の生き方を選択し、決定していく。こうした営みなくして、果たして人間は主体的に自らの生に関わっていくことができるだろうか。

これはまさにアイデンティティの問題と言えるが、現代の日本においては、それが非常に確立しにくい状況にある

と思われる。さらに言えば、大多数の現代日本人は、アイデンティティが拡散しており、社会から疎外された状況に生きているのではないかと思うのである。先ほど、フアジイ概念の導入は、科学的ルネサンスであり、科学が人間に近づいたという意味のことを書いたが、それはそれで大変結構なことである。しかし、当の人間があまりにもフアジイに過ぎるのではないかと思うのである。

そこで本論文では、そうした現代の日本人の有り様をアイデンティティの危機という視点から一考察してみようと思う。

一、日本人のアイデンティティ

アイデンティティとは、アメリカの精神分析家で心理学者でもあるエリクソン (Erikson, E. H.) によって提唱された概念であるが、これは、端的に言えば「私とは何か」という問いに答えるものである。そしてそれは自己の単一性、連続性に関する自らの知覚・認識 (ego identity) と自分を取り巻く社会もまたそれを承認しているという自覚 (group identity) の二つが調和的に統合するところに確立される。

一人の人間は個人的創造物であると同時に社会的構成物なのであり、アイデンティティ概念の重要な特徴は、まさに個人と社会との関係を重視した点にあると言える。すなわち、アイデンティティの確立は一定の対象や一定の集団、及びその成員との間で是認された役割の達成、共通の価値観の共有を介して得られる連帯感・安定感に基礎づけられて初めて確立されるものなのである。

またアイデンティティ概念のもう一つの重要な特徴は、それが決して実体的・不変的な自己を想定し、その確立をめぐすものではなく、時間的・人間的な諸関係の変転を貫いて、「同じ・この・私」であると「再認的に指示、同

定」され得ることであるという点である。従つてそこには「変化」という要素が含まれているのは言うまでもない。ただどんなに変化しても「この私」が変わつたのであり、「同じ・この・私」という同一性は保持されなければならぬのである。その意味においてアイデンティティとは、「私というもの」を意図するものではなく、「私ということ」を意図するものであると言えよう。

それでは、日本人のアイデンティティのあり方にはどのような特徴があるのだろうか。

日本人は主体性にかけて、何でも自分の意志でものを決定せず、その時々場の状況に身を委ねるといふことはよく言われることである。南(南 博)はこうした日本人の特徴について、それは外的客我に対する意識の強さからくる自我不確実感によるものであるとして<sup>(1)</sup>いる。人間には「する自分」「見る自分」としての主体的自我(主我)と「される自分」「見られる自分」という客体、対象としての受動的な自我(客我)があり、さらに客我には、主我としての自分から見られる客我(内的客我)と他者から見られた自分、他者が抱えていると思われる自分についてのイメージという面での客我(外的客我)があつて、それらが複雑に絡み合いながら、一人の人間を形成しているが、日本人はそのうち、外的客我に関する意識が非常に強い<sup>(2)</sup>ため、それに引きづられて、内的客我がさらには主我までもひ弱なものになつていゝるのである。外的客我を強く意識するということは、他者の自分に対する評価が常に自分の生活の中で重要な役割を演ずるため、必然的に他者中心的、他者依存的、他者本位的な傾向が現れ、それによつて主体性が動揺し、不安が生じて、自我全体の不確実感がもたらされるのである。

そしてそうした自我不確実感を補償するために、自分の所属する集団の共通意識や内部の人間関係に深い親和感をもち、自分の自我を集団と一体化させ、そこに集団としての自我を形成していこうとする。そして集団としての自我によつて、個としての自我を強化し、自我全体の不確実感の不安を解消しようとするのである。

日本人に多いとされる神経症状として、対人恐怖があげられる。対人恐怖症とは「他人と同席する場面で不当に強い不安と精神的緊張が生じ、そのため他人に軽蔑されるのではないか、嫌がられるのではないかと案じ、対人関係から出来るだけ身を退こうとする神経症の「型」(『精神医学事典』弘文堂)である。そして対人恐怖がその他の恐怖と異なるのは、単に恐怖の対象のみではなく、面前する他者からの蔑視と忌避を恐れる点、世界との間に結ぶ関係様式が自己の存在(ないしは属性)によって外界(ないしは他者)に影響を及ぼすことを恐れること、すなわち「他者中心」的であることなどが指摘されているが、これも外的客我が優先して、内的客我や主我を萎縮させるためと捉えることができる。

先にアイデンティティとは、自己の単一性・連続性に関する自らの知覚・認知と(ego identity)と自分を取り巻く社会もまたそれを承認しているという自覚(group identity)の二つが調和的に統合するところに確立されると書いたが、こうした日本人の自我構造の特徴をアイデンティティという視点から捉えるならば、日本人はgroup identityというものを非常に重視すると言えよう。すなわち、日本人の場合は、自分の属する共同体(社会)と同化することで個としての自らの存在をその共同体(社会)との関係の中に融和させていこうとするのであり、自らのアイデンティティを共同体アイデンティティの中に埋没させてしまうのである。これは、自他の分化を重視し、あくまでもアイデンティティは個の確立が最重要課題であり、社会の承認はそれを補完するものであるとする欧米型のアイデンティティとは異なる日本的なアイデンティティのあり方であると言えよう。

ところで、こうした日本的なアイデンティティ(自己の個性を押し殺しても、その共同体(社会)に従うことによってもたらされる)を確立させるためには、個をその共同体に帰属させるような共通原理がなくてはならない。そしてこの共通原理からはみ出した、あるいはそれを受け入れることができない人々は、その共同体(社会)から疎外<sup>3)</sup>

され、文字どおりの意味での周縁へと追いやられてしまう。そして日本人にとっては、共同体（社会）の周縁へと追いやられてしまうことは、とりもなおさず、アイデンティティの危機を意味するのである。

## 二、文化・社会の中心と周縁

それでは、共同体の周縁とはどのようなことを指すのであろうか。先ほど、私は「文字どおりの意味での周縁」と書いたが、わざわざ「文字どおり」という言葉を付したのは、いささか意図あつてのことである。周縁と「文字どおりの意味での周縁」とは、その意味において大きな違いがあるのである。

人間の社会には、その社会の成員が共有しているある考え方、感じ方、信じ方があり、またそれはその社会の文化と呼ぶことができる。そして、人間の社会・文化が一つのまとまりをもった体系として維持され、機能していくためには必ずその社会・文化の中心となるものが必要であり、また中心を中心ならしめるためには、中心によって排除された周縁というものがなくてはならない。

日本において、この中心／周縁という図式を提起したのは、山口（山口昌男）であるが、彼は、『文化と両義性』<sup>(4)</sup>の中で次のように述べている。

あらゆる人間の社会・文化は、その秩序を創出し再認するために、曖昧なもの・異質なものを排除・抑圧し、境界および防壁を築きあげる。境界イメージを、生き生きと浮かび上がらせるためには、秩序の周縁部に出没する魔性の者（異人）を作りあげるのもっとも有効な近道である。それはまた、意識の内なる異和性を可視的なものに転化・外在化し、境界の外に追放しようとする願望の現れである。

文化の中の挑発的な部分は、それが秘める反社会性の故に、発生状態においては、周縁的部分に押しやられるが、絶えざる記号の増殖作用の故に、中心部分を生気づけている。中心部分は、境界を時と場所を定めて視覚化、強調し飾り立てることによって、中心を構成する秩序に対する「逆定言」を行うのである。

山口によれば、中心とは文化・社会を維持していくための秩序・制度・原理であり、周縁とはそうした中心によって排除された異質なものの・無秩序なもの・制度化されないものであるが、この引用からもわかるように、山口の論におけるさらに重要な点は、中心と周縁の関係性についてであろう。すなわち中心は自らが排除した周縁というものを時と場所を定めて蘇生させることを通じて、中心としての秩序自体を活性化させるとのことである。換言すれば、一つの文化・社会は内への求心力をもつ中心とそれとは逆向きのベクトルをもつ周縁とによって成立しているが、中心は周縁を排除すると共に、周縁によって活性化され生気づけられ、強化されており、そうした中心と周縁のダイナミズムの中に文化・社会が維持せられ、機能しているということである。その意味において、周縁とは裏返された中心であり、中心に裏側から組み込まれた文化メカニズムなのである。

このように周縁をとらえるならば、そこに位置する人々も、彼らが属する文化・社会において重要な役割をもち、必須の構成要素として機能しているということになる。彼らは裏返された中心であって、文化・社会の維持、発展にポジティブに参与しているからである。

しかし、現代の日本の社会を考えると、もはやそうした中心／周縁という二項図式では捉えきれない新しい階層の人々が出現しているのではないかと私は思うのである。そして、日本社会においては、そうした中心にも周縁にも

なり得ない人々が圧倒的な多数を占めているのではないかとさえ思われる。

そうした、山口がいう意味での中心にも周縁にもなり得ない人々が、文字どおりの意味で社会の周縁にふちに追いやられた人々、社会から疎外された人々であり、現代の日本社会の大部分を占めるいわゆる「ふつうの人々」なのである。

そこで次節においては、このいわゆる「ふつうの人々」を生み出した現代の日本社会の構造について考察してみた。

### 三、現代日本社会の中心と周縁

第二次大戦後から現在に至るまでを現代と捉えるならば、私はその社会において優先する中心原理という視点から、さらにそれは二つの段階に分けることができると思う。

第一段階は戦後から高度経済成長期を経て八〇年代前半のいわゆる低成長期に至るまでであり、第二段階は、それ以後からまさに現在進行中の形で進展している。

戦後の日本社会は、民主化と経済成長を二大旗印に掲げて復興を始めた。そして日本の場合、両者の関係は明らかに経済成長優位であり、経済成長によるパイの分け前の増加によって、不平等感を覆い、平等で豊かな社会をもたらそうとしたのである。

日本人はモーレッツに働き、海外からエコノミック・アニマルと称され、「うさぎ小屋」に住むワーカホリック（働き中毒）と揶揄された。

明らかにこの時代の社会を貫いていた中心原理は経済性・物質的豊かさの追求であり、それに裏打ちされた平等へ



の憧憬であった。多くの日本人にとって、この原理から逸脱することは罪悪であり、またこの原理に従うことで自らのアイデンティティを確認していたのである。

この段階において、経済性・物質的豊かさの追求という中心原理は、強烈な求心力を持っており、ほとんどの日本人はこの原理のもとに内へ内へと結集していたと言えよう。

しかし、その一方で、この段階においては、こうした中心原理に背を向ける逆向きの力が存在したことも忘れることはできない。

それは、学生運動をはじめとする反体制運動の高揚であり、Gパン・Tシャツ・ヒッピーあるいはロック・フォークといった対抗文化の形成である。その担い手は、殆ど若者であったが、彼らは平等と豊かさという美名の内に隠された、効率と競争第一主義の現存社会を批判し、自由で自然で内面性を重視する新しい世界を熱望したのである。

従って、この段階での日本の社会は、経済性・物質的豊かさの追求という中心とそうした中心原理における競争主義や功利主義を批判する反体制運動あるいは上述の対抗文化という周縁が存在したと考えられる。そして先に述べたような日本のアイデンティティの特性、すなわち個性を押し殺しても、自分の属する集団と同化することで個としての自らの存在をその集団の共通原理の中に融和させていこうとする特性は、日本人をその中心／周縁のどちらかに組み込ませることを余儀なくしたのである。つまり、まさにこの段階においては、内への求心力をもつ中心とそれとは逆向きのベクトルをもつ周縁とのダイナミズムのなかに当時の日本社会が維持・形成されていたと捉えることができるのではないだろうか。

しかし、第二段階（低成長期から現在）になるに及んで、そうした中心／周縁という二極構造は次第にその様相を変えていった。中心にも周縁にも属し得ないような人々、それも少なからぬ人々が誕生したのである。

確かに第一段階における中心原理すなわち経済性・物質的豊かさの追求は、一応達成され、われわれの社会は一見平等がもたらされたかのように思われるようになった。一九五五年以降、十年ごとに実施されてきた「社会階層と社会移動全国調査」の第三回調査（一九七五）の分析結果は次のように結論している。

- (1) 所得・教育・職業（職業威信）など社会的資源の分配の平準化。
- (2) 社会移動量（率）の増大、および世代間の職業機会の開放性の増大。
- (3) 職業的地位達成において出身階層によって人生が決められる属性主義原理から業績主義原理の優位への移行。
- (4) 「中」階層意識の一層の増大。
- (5) 地位の非一貫性による多様な「中間層」の増大。

この結果、「戦後の日本社会はいまだかつてなかったほどの平等社会を実現するに至った」という見方が支配的になったのである。<sup>(5)</sup>しかし、一九八〇年代に入ってからには、日本社会の階層構造が変容し、その格差の拡大が叫ばれるようになっていく。

例えば、一九五五年から一九八五年までの個人収入格差の変化を見てみると、一九七五年までは一貫して減少を続けていた値が、一九八五年には再び増大して、格差が広がっている（図一）<sup>(6)</sup>。また、父と子の世代間の職業移動率を見ても、全体としてかなりの移動率がみられるものの、一九五五年から七五年までは上昇しているが、八十五年には六十五年なみに低下している（図二）<sup>(7)</sup>。

さらに人生の様々な選択を行う際に、「世間の人々がどの程度階層ということを重視していると感じるか」についての、一九七五年と一九八五年の調査結果を見ると、この十年間で、人々が階層を重視しなくなったという傾向は全く窺えない（図三）<sup>(8)</sup>。すなわち国民の七割以上が「中」意識をもつようになったとは言え、それは階層のない平等な

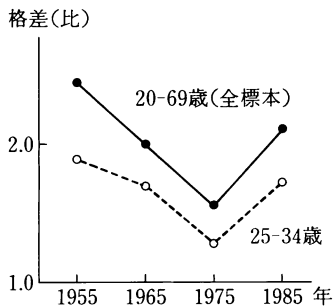
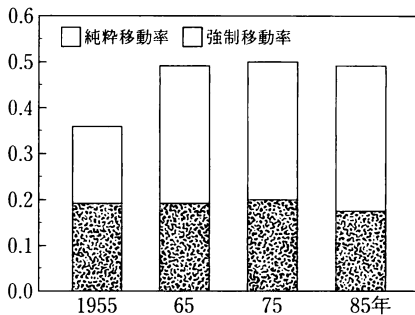


図1 個人収入格差の変化

注：1) 順位が下から25%目の者と、75%目の者の年収の比をとったもの。  
 2) 男子のみ。ただし、農林的職業従事者を除く。

図2 社会移動率（3分類）



注：事実移動率＝純粋移動率＋強制移動率

図3 世間の人びとの階層重視の度合 (％)

		重視して いる	まあ重視 している	重視して いない	DK, NA	合計
結婚相手の選択	1975年	21.9	44.2	32.4	1.5	100.0
	1985年	25.9	45.8	23.7	4.6	100.0
親友の選択	1975年	16.0	33.5	48.8	1.7	100.0
	1985年	16.2	31.6	48.0	4.2	100.0
子どもの学校の選択	1975年	18.5	43.7	35.5	2.3	100.0
	1985年	21.6	40.7	31.2	6.5	100.0
支持政党の決定	1975年	15.6	38.4	42.0	4.0	100.0
	1985年	16.1	32.6	44.7	6.6	100.0

注：標本数は、1975年1296（B調査）、1985年1239（男性A調査）、いずれも男子のみ

社会が達成されたということではなく、依然として人々は階層というものを強く意識しているのである。

また、直井(直井 優)は、上階層や特権階層においては、既に階層の固定化が進展しているとして、次のような兆候を指摘している。<sup>(9)</sup>

- (1) 不動産や金融資産をもつ資産家階層では、生前贈与もしくは相続という方法で、資産の直接継承を行っている。
- (2) 所有権をもつ企業主は、子どもにその所有権を継承していく。
- (3) 政治家・開業医・大寺院の住職など特権をもつものは、それを保持するために子どもに直接的に地位を継承していく。

そしてこうした上階層や特権階層が、子どもの婚姻によって、閥閥を構成し階層構造の頂点に位置し、日本社会の中心を形成していくのである。

以上のようなことから、第二段階においては、第一段階の経済性・物質的豊かさの追求およびそれに裏打ちされた平等化という中心原理が、もはやその求心力を失い、それに変わって、階層意識あるいはステイタス上昇願望というものが新たな中心原理として求心力をもち初めてきているということが言えるのではないだろうか。一九八五年以降に登場した「 $\textcircled{A}$ 」「 $\textcircled{B}$ 」「ニューリッチ」「ニューブアー」「分衆」あるいは「お嬢様ブーム」「玉の興現象」などは、この中心原理の変化を反映した社会現象ではないかと思われる。

そしてさらに重要なことは、そうした現在の中心原理に組み込まれる人々は、極一部の上階層や特権階層に位置する人々であり、大部分の人々はそれに与することができないということである。なぜならば、第一段階において、達成されたかに見えた平等化は、実は幻想であり、実際にはその間も着々と格差は拡大し、階層分化が促進されていた

からである。

もてる者は、それをより強固なものにするために、もてる者同士で固まり、自らのステイタスを固定化させる。その一方で、国民の七割を占める「中」意識をもつ人々「いわゆる人々」は、自らの内に階層意識をもち、また階層の上昇志向をもちながらも、実質的には中心原理からはじき出されてしまうのである。

#### 四、現代におけるいわゆる「ふつうの人々」の周縁性

第二節において、一つの文化・社会を維持・形成していくためには、中心と周縁が必要であること、また中心と同様に周縁も周縁としてそれ自身の中にエネルギーをもっており、両者の緊張関係において文化・社会が一つのまとまりとして維持されると述べた。

しかし、現代（第二段階）における先述のようないわゆる「ふつうの人々」は、今の社会を支配している中心原理からはじき出され、かと言って、それに対抗するようなエネルギーをもつ周縁にもなり得ないのである。従って、彼らは中心と周縁にはさまれたエネルギーの空白の場にさまよっているのであり、それは「文字どおりの意味」において社会の周縁へと追いやられていると言えるのではないだろうか。すなわち彼らは現代社会から疎外された状況を生きているのである。

そして、自らのアイデンティティを確立する上で、自分の属する共同体への融和、そして共同体からの承認を重視する日本人にとって、こうした状況はまさにアイデンティティの危機を意味するのではないだろうか。

本論の冒頭の部分で、ファジィという言葉の流行は、現代の日本においてある必然性をもってしていると述べた。そしてその必然性とは現代の日本人のアイデンティティのあり方がまさにこのファジィという言葉に象徴されているとい

うことなのである。デカルト主義的近代合理性への反照として脚光を浴びたフアジイ概念は、日本という土壌においては、むしろ自らの存在のあり方を表現するものとして、共感的に受容されたのではないだろうか。そして現代社会を支配する中心原理がその求心力を失わない限り、あるいはそうした社会内原理にわれわれが親和性をもっていく限り、現代日本社会のいわゆる「ふつうの人々」は社会から疎外され、またアイデンティティを確立し得ないまま、文字どおりの社会の周縁を漂流して行くのではないかと思うのである。

## 追記

智山伝法院現代教学研究室では、研究室協同テーマとして、「宗教と社会―現代日本人の心性―」を掲げ、①文化(生き方、価値観)・②社会(社会問題、社会病理)・③宗教(宗教現象)という三つの視点から、このテーマについてアプローチしているが、本論は主として①の視点から論じようとしたものである。

現代のように膨大な情報が錯綜し、また生活様式が多様化した時代に生きる人々を一概に論ずるのは困難であり、従って本論に対しても様々な反論あるいは不適合が指摘されることであろう。

しかし、多様な様相をもつ現代ではあるが、人々の価値観はそれとは裏腹にかえって一元化しているのではないかと私には思われるのである。そしてそれは今まで日本人が余りにも自己あるいは自我についての洞察を回避してきたことに起因するものではないだろうか。現代は近代的自我の超克が課題とされるが、われわれはもう一度徹底的に自分というものにこだわって問い直してみる必要があるのではないかと思うのである。

また今回は紙面の関係で触れられなかったが、現代人のアイデンティティ形成にとって、宗教の果たす役割は非常に大きいと思われる<sup>10)</sup>。その詳細な検討については次回の課題にしたい。

註

- (1) 南博著『日本的自我』岩波新書
- (2) 笠原嘉、藤縄昭、関口英雄、松本雅彦著『正視恐怖・体臭恐怖』医学書院
- (3) 笠原嘉著『精神病と神経症』みすず書房所収
- (3) 疎外という言葉にはいろいろな意味がある。哲学の分野においては、ヘーゲル、フョイエルバッハ、マルクスなどがそれぞれ独自の疎外概念を用いているが、私がここで用いている疎外という意味は、主に精神分析あるいは心理学の分野でフロイト学派によって用いられた「ある文化のメカニズムに対する個人の適応障害」ということに近似である。
- (4) 山口昌男著『文化と両義性』岩波書店
- (5) 遠藤惣一、光吉利之、中田実編『現代日本の構造変動』一九七〇以降―世界思想社一八九頁
- (6) 原純輔編『現代日本の階層構造② 階層意識の動態』東京大学出版会所収
- (7) 遠藤惣一、光吉利之、中田実編『現代日本の構造変動』一九七〇以降―世界思想社所収
- (8) 原純輔編『現代日本の階層構造② 階層意識の動態』東京大学出版会所収
- (9) 遠藤惣一、光吉利之、中田実編『現代日本の構造変動』一九七〇以降―世界思想社二〇四―二〇五頁

(10) 筆者が信仰をもっている者ともっていない者のアイデンティティ形成度を調査したところ、宗教に対して強い信仰をもっている者はそうでない者よりもアイデンティティ形成度が高いということが実証された。詳細は拙論「アイデンティティ形成に占める信仰の位置」(智山学報 第三九輯所収) 参照のこと。